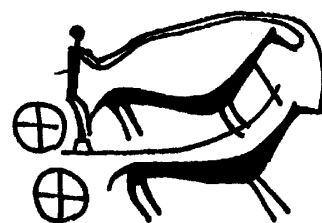


センターニュース

Hokkaido University
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター

Newsletter No. 47



全学教育の科目責任者からひとこと

(3-5 ページ)

重要さを増す TA 研修会 (6ページ)

インターンシップのあり方について (11ページ)

AO入試の3つの課題 (12ページ)
—平成14年度第2期高校訪問から—

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言

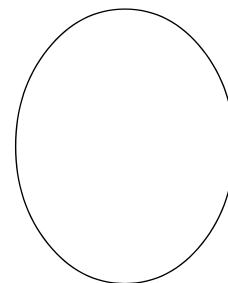
FOREWORD

高大連携を通して人材育成を考える

理学研究科教授 佐々木 陽一

学生の基礎学力の低下、理科離れが言われる中で、今世紀の科学を支えリーダーシップを取れる人材を確保してゆけるかどうか、人的資源に支えられる日本の将来を考えると、深刻な問題である。いかにしたら優れた人材を大学に受け入れられるか？ 大学はその受け入れた人材をきっちり育てられる体制になっているだろうか？ 特に、化学の研究者を育てる役割を担った筆者ら理学研究科化学専攻の教官には、このような問題に深刻な危機感がある。学力低下、理科離れといっても、リーダーシップをとれる人材は必ずいるのであり、それらの人材をいかに発掘し、いかにきっちりと育てられるかがポイントとなってくる。

これまでは、一般的な教育システムの中で全体のレベルアップを心掛けていれば、自然にその中からリーダーシップを取れる人材も育って来た。基礎学力の低下が問題にされる昨今は、そうはいかない。危機感の根源はそこにある。平均像の底上げについては、大学だけが高校以下の教育のつけを払おうとしても効果的な対策はたたない。教育制度全体の問題として捉えねば解決出来ない問題だからである。しかし、こんな現状でも、リーダーシップを取る人材の育成は、大学がや



り方次第で十分対応出来よう。

適切な刺激を

理科は身の回りの自然現象を対象とするもので、本来子供達の興味をそそるものである。それが、今の初期の教育システムの中で、失われてゆくのだとすれば、適切な刺激を与えてやれば、本来の興味を取り戻せるはずである。また、興味を持ちながらはっきりした像を持てないでいる高校生に明確な目標を持たせることも重要である。そこに、大学の先生のはたせる役割がある。それは私達化学専攻の教官が、高大連携の試みの中から感じた印象である。

理学研究科化学専攻では、平成13年度から札幌南高校生を対象とした講義と研究室訪問を実施して来た。他の高大連携授業と異なる点は、10人の講師が週1人ずつ10回のシリーズの講義として実施した点である。初年度は化学専攻だけで講師を務めたが、2年目は工学研究科、触媒センターの教授陣にも協力をお願いし、快く引き受けていただいた。個々の授業の後で、受講生に書かせた感想文はこの授業の効用を生き生きと伝えて来た（感想文の一部は、「高等教育ジャーナル第11号」に掲載）。高校生の授業の中では教え切れない、研究最前線現場からの授業の繰り返し、高校生の眠りかけている化学への強い好奇心を確実に呼び覚ますことが実感出来た。この授業を受講し化学科にAO入試で合格した学生は、10回のシリーズであることが大きいと話してくれた。

高校生の感想を読むと、高校生が幅広く最先端の知識を伝えてくれるこの種の授業に期待している様子が良く分かる。高大連携授業は、高校と大学のギャップを埋め、将来性の高い人材を、逃さずこちらに目を向けさせるのに、極めて有効に働く。指摘しておきたいのは、高校生の反応は「化学」の授業をやったからと言うことでは決してない点である。感想文には、他の理科の科目、さらには法学なども

で、幅広い対象の授業を希望する声がみられる。シリーズで講義を行うことは決して容易ではないかもしれないが、実施すれば必ず一定の効果が期待出来る。たとえ1度ずつの出前講義でも、高校を訪ねての高校生との情報交換でも、効果は十分ある。今は人材発掘、育成の意味でも、大学の教官がそのような役割を果たすべき時代と言えるのではないだろうか？

AO入試合格者の不満

さて、化学専攻ではAO入試を4年前から実施（初年度は推薦入試）して、10名ずつの学生を受け入れて来た。受験者には、将来大学院に進学し、化学の研究者となることを希望するものとなっている。化学の研究者へのエリートコースという位置付けである。しかし、入学後にそれに相応しい教育を行って来ているだろうか？答えは否である。AO入試合格者に聞くと、異口同音に化学の勉強に意欲を持って入学して来たのに、1年生では化学の講義は1回きり、実験もないということで、折角のやる気が失せてゆく、と言う。専門をきっちりやるには幅広い知識教養が必要ですよという言い方は、これらの学生、いや多分大多数の学生には説得力を持たないのだろう。

今の1年生の教育課程は少なくとも、エリート教育には適し堀いがないと言える。何か根本的に変えてゆかなければいけない。そうでないと、エリートを育てたいと言う我々の目標が宙に浮いてしまう。そんな危機感が我々には強い。早い学年から研究室に所属させるとか、専門の講義を積極的にうけさせるなど、AO入試合格者を対象とした新しい化学教育のあり方が、化学専攻では議論されはじめている。AO入試の位置付けを単なる多様な入試の一形式とするのではなく、「エリートコースへの入り口なのですよ」というメッセージを高校生に送り、それを入学後の教育コースを充実させて定着させたいと考える。

全学教育

GENERAL EDUCATION

*** 全学教育の科目責任者からひとこと ***

科目責任者は、全学教育を円滑に運営するために、平成 11 年度から任命されています。科目責任者で構成される科目責任者会議は、各部局間の調整等のために以下の協議を行います。(1) 授業内容、(2) 成績評価基準、(3) 授業開講数、(4) 授業担当者の選定、(5) 授業科目ごとに配当される予算の運用、(6) その他全学教育科目に関し必要な事項。一昨年度、コアカリキュラムを中心とした授業に一新されたことを機に、各責任者の方々に抱負を書いていただいております。全学教育でどのような授業が行われているかがわかります。ご覧ください。

人間文化の幅広さ、奥深さを学んでほしい

「人間と文化」担当責任者 教育学研究科助教授 横井 敏郎

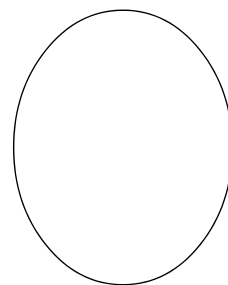
図式的に見れば、近代科学は、自然科学、人文・社会科学ともに、研究の領域を細分化し、専門化することで発展を遂げてきたといえる。自然、社会、人間から神秘のベールを引き剥がし、いかなる要素によってそれらが構成されているかを近代科学は解明してきた。

しかし、いくら科学全盛の時代だとしても、単純な話、この世から宗教が消えてしまったわけではない。人間の存在するところ、どこにでもその精神的な営みがある。当たり前のことだが、科学も人間文化の 1 つである。いわば人間の行為そのものが文化なのである。それだけに「人間と文化」というテーマは、たいへん大きな裾野の広がりをもつものであ

る。

今年度の複合科目「人間と文化」は、宗教、芸術、メディア、コミュニケーションから平和、高齢者問題、地域研究、経済、技術にいたる多様な対象、問題を内容とする授業を揃えて

いる。学生諸君はこれらすべてを履修することはできないが、1つの授業を通じて人間文化の幅広さ、奥深さを感じ取ってもらいたい。そして人間文化の創造と豊富化をもたらす存在に成長してもらいたい。



「社会の認識」の多面性

「社会の認識」企画責任者 経済学研究科助教授 岩田 智

「社会の認識」にかかわる問題をここでは、経営学の視点から考えてみることにしたい。

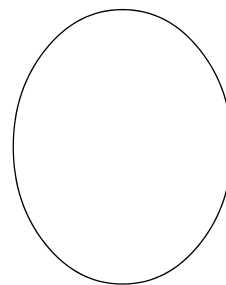
社会をどのように認識するかで、企業の行動も大きく変わってくる。例えば、次のようなことが考え

られる。今後、日本は着実に高齢化社会を迎えるといわれている。このことは、製品やサービス市場の面からみるとシルバービジネスなどビジネスチャンスとして認識することができる。そして、企業はそ

のための新しい製品やサービスを開発するという行動をとることが考えられる。他方、労働市場の面からみると仕事の担い手がなくなるという深刻な問題として認識することができる。そして、企業はそのためにより作業の機械化や海外進出といった行動をとることが考えられる。このように、1つの社会現象であってもその認識は多面的であり、その認識の違いによって企業や人間の行動も多様化する。

このことは、「社会の認識」には多面性があり、

様々な視点からの理解が必要なことを示している。本学では、多数の教官が「社会の認識」の授業にかかわっているが、それぞれの教官が専門に基づいた授業を展開することによって、多面性をもった「社会の認識」に関するより一層の理解が可能になると考えられる。



海への誘い

「環境と人間」担当責任者 水産科学研究科教授 飯田 浩二

新緑がまぶしい季節になりました。私の所属する水産学部は函館キャンパスにありますが、かつて戊辰戦争の舞台となった五稜郭公園の桜が、まもなく、札幌円山公園より一足早く満開になります。札幌から車で4時間、JRで3時間ほどかかりますが、毎日たくさんの水産学部の教官が授業や会議のために札幌キャンパスに出かけます。

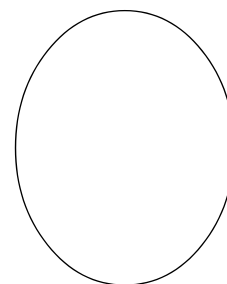
私が受け持っている授業は複合科目の「環境と人間」の内の2科目で、1学期に開講される「海の環境と資源を計る—海洋計測学入門—」と、「サケ学入門—サケ・マスと人との関わり—」です。「海洋計測学入門」では地球環境における海の役割に始まり、海の物理、化学、生物を実際どのようにして計るのかを、各担当教官が自分の専門の立場からおもしろく解説します。私の専門は音響資源計測学で、水中音を利用してプランクトンのような微小生物か

らクジラなどの巨大生物をいかにして計るかという話をします。

一方、2学期に開講される「サケ学入門」ではサケと人間との関わり、母川回帰という不思議なサケの生態、美味しいサケの食べ方

など、社会、生物、環境といった幅広い観点からサケに迫ります。私の担当はサケの回遊や遡上の不思議な生態を魚群探知機やソナーで調べた水中リモートセンシングの話です。

今年から科目責任者となり、水産学部ばかりでなく、工学、医学、文学などあらゆる分野を志している学生相手に海を魅了する講義をしようと意欲満々です。



生きる力としての生物学

「生物学」企画責任者 理学研究科助教授 枡内 新

いつの間にか「生き残りの時代」ということで、漫然としていたのでは、大学そのものも淘汰されてしまうようになってしまったらしい。大学を作ったはずの政

府が、大学を作りすぎたという政策の失敗を認めたという話も聞かないが、とにかく多すぎてこんなにはいらぬという現状分析をしたのだろう。どうやっ

て淘汰するかということ、大学の使命である研究と教育の業績でふり分けるといふ。研究業績は論文数やノーベル賞の数で、数量化できる面もあるので基準さえ決まれば競争は成り立ちうる。だが、教育業績はどうやって比較するのだろうか。学生の満足度（人気投票）や、大学院進学率（就職モラトリウム率）、博士号取得率（博士号運転免許化）が危険な物差しであることは、現場にいるものなら良く知っている。外部に対するリップサービスに陥る危険性大である。

ならば、外からの評価に身を委ねることなく「これが我々の教育である」と自信を持って言えることに徹するのが良いだろう。生物学で言うならば、21

世紀という時代に次々と提起されてくる地球や人類の存続にかかわるテーマである地球環境問題や、生命そのものの存在基盤を危うくする遺伝子・生命操作などに関する政策決定に対し、しっかりとした判断と意見を持つための「生きる力としての生物学リテラシー」を身につけさせることが、その一つである。全学教育の生物学こそ、その場にふさわしい。

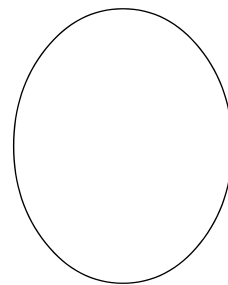


表1 2003年度全学教育科目責任者名簿

科目責任者の名称	所 属	職 名	氏 名
「健康と社会」企画責任者	教育学部	教 授	森 谷 眞
「体育学」企画責任者	教育学部	〃	須 田 力
「思索と言語」企画責任者	文学部	助教授	花 井 一 典
	言語文化部	〃	ポール・スティブルトン
「歴史の視座」企画責任者	文学部	教 授	三 木 聡
	法学部	助教授	辻 康 夫
	経済学部	教 授	宮 本 謙 介
「芸術と文学」企画責任者	文学部	助教授	石 原 次 郎
	言語文化部	〃	堀 田 真 紀 子
「社会の認識」企画責任者	文学部	教 授	煎 本 孝 夫
	法学部	助教授	辻 康 夫
	経済学部	〃	岩 田 智 介
「科学・技術の世界」企画責任者	文学部	教 授	菱 谷 晋 介
	理学部	〃	杉 山 滋 郎
「心理学実験」企画責任者	文学部	〃	阿 部 純 一
「統計学」企画責任者	経済学部	〃	長谷川 光 博
「数学」企画責任者	理学部	〃	山 下 昇
「物理学」企画責任者	理学部	〃	河 本 幸 雄
「化学」企画責任者	理学部	〃	日 夏 幸 雄
「生物学」企画責任者	理学部	助教授	梶 内 新 信
「地学」企画責任者	理学部	〃	新井田 清 信
「情報処理・情報科学」企画責任者	工学部	教 授	大 内 正 生
「図形科学概論」企画責任者	工学部	〃	上 田 雅 年
「英語」企画責任者	言語文化部	〃	宮 下 吉 文
「ドイツ語」企画責任者	言語文化部	〃	高 橋 吉 文
「フランス語」企画責任者	言語文化部	助教授	橋 本 晃 一
「ロシア語」企画責任者	言語文化部	教 授	杉 浦 秀 一
「中国語」企画責任者	言語文化部	助教授	渡 辺 浩 司
「韓国語等」企画責任者	言語文化部	教 授	古 賀 弘 人
「日本語・日本事情」企画責任者	留学生センター	助教授	中 村 重 穂

* 任期は2003年4月1日から2005年3月31日まで。

高等教育

HIGHER EDUCATION

重要さを増す TA 研修会

4月4日（金）に、改装間もないN棟2階の演習室を利用して、以下のプログラムにより TA 研修会が実施されました。全学教育の TA 任用人数は延べ数で447名（対前年度12%増）に達しました。研修会には173名（学部 TA 48名を含む）が参加し、このうち136名がすべてのプログラムに参加して修了

者として認められました。午前中は、本学の全学教育と大学教育についての基礎についての講演があった後、TA の役割についての講義が行われました。最後に、TA 経験者を交えたパネル討論を実施しました。午後1時から、新たな試みとして TA 経験者のみによるコーヒブレイク（教官は参加しない）を

表2 2003年度北海道大学 TA 研修会プログラム

日時：2003年4月4日（金）

会場：N棟2階演習室（主会場）

主催：高等教育機能開発総合センター

<プログラム>

9:15 受付開始

9:30 挨拶 中村睦男 総長

9:35 講演

「北海道大学の全学教育」

徳永正晴 センター長、安藤 厚、小笠原正明

10:10 ミニ講義

「大学教育の基礎について」西森敏之

10:25 講演

「Teaching Assistant」瀬名波栄潤

10:55 休憩

11:05 パネル討論

「TAの可能性～現状と理想」

司会：瀬名波栄潤

パネラー：奥 聡、中戸川孝治、藤井 光（大学院生）、堂河内 寛（大学院生）

質疑応答

12:00～13:00 昼食

13:00～13:30 コーヒブレイク（自由参加）

TA経験者の談話 藤井 光

堂河内 寛

13:30 授業形態別セッション

会場：N304, N302, N231, N232, N233, N242, N243, N244, N270, N271

A. グループ学習【N302（主会場）、N231, N242】：
小笠原正明、鈴木誠、山岸みどり

グループ学習の実際：鈴木誠

グループ討論（ケーススタディ、レポート評価）

B. 講義【N304（主会場）、N232, N243】：

瀬名波栄潤、西森敏之

論文指導の実際：西森敏之

大講堂の使い方

グループ討論

C. 情報【N271】：大内 東、川村秀憲、森康久仁（大学院生）

情報処理教育について：川村秀憲

情報処理TAの実際：森康久仁

グループ討論：情報処理教育特有の問題について

D. 実験【N233（主会場）、N244】：

米山輝子、細川敏幸、市川端彦

実験指導とTAの役割 米山輝子、市川端彦

グループ討論

E. 語学【N270】：竹本幸博、渡辺浩司

語学教育のポイント：竹本幸博、渡辺浩司

16:00 終了

開催しました。各グループ毎のセッションは表のような内容で実施されました。

グループ学習分科会：ケース・スタディー

理学，農学，工学，医学の各研究科から約40名のTA任用者が参加しました。特に医学研究科で専門教育を担当するTAが目立ちました。最初に学生の気持ちをリラックスさせるための「アイスブレイキング」を実際に経験したあと，グループ学習についての短いレクチャーがあり，ついでグループに分かれて，この形式の学習で生じる可能性のある問題についてケーススタディーを行いました。「毎回授業が終了する頃に入っている学生が2名いる。入ってきても要領よく課題を写し，欠席を逃れている。どうすれば良いだろうか?」「グループ作業を進める中で，グループリーダーのA君から『Bがほとんど参加しなくて困っている。どのようにすれば良いだろうか?』という相談を受けた。TAとしてはどのように対処すればよいか?」などの実際に起こりそうな問題について討論し，その結果を報告した。最後に時間をかけて，ある授業で課題として提出されたエッセイの実例を分析して，評価法の検討を行った。

実験分科会：学生を良く観察

今年から講演を2名の教官にお願いすることになりました。今年は，化学実験担当の米山と物理学の市川がそれぞれの分野の観点から40分講演いたしました。次に細川がグループ討論方法の概説とアイス

ブレイキングを行いました。学生は4つのグループに分かれ，「そばについていないと実験ができない」，「外部から入ってきた学生とおしゃべりをする」，「遅刻してきて遅くまで実験をする」，「優秀な学生だがレポートを期限までに出さない」学生がいた場合にどうするかというテーマで討論し，発表しました。討論の時間は60分しかありませんでしたが，どのグループもよく整理された発表でした。いずれも，段階を追って対応を考えており，対象の学生の置かれた状況をよく観察して問題解決を図るべきである旨のまとめでした。ここで話題になったのは，北大ではTAの権限と職務の範囲が不明確であるということでした。今後の大学側の明確な対応が望まれます。

講義分科会：作文の添削と論文の評価

今年からの企画としてまず30分ほど共通教育掛の土本さんが講義室の様々な機器の使い方や出席カードについて説明しました。そのあと，作文の添削をする班2グループ（西森担当）とレポート論文の評価をする班4グループ（瀬名波担当）にわかれ，小グループ学習を行いました。作文添削では「書く力がつくように」添削し「もっと書きたくなるように」コメントするという課題を，論文評価は瀬名波の示した採点基準に従って成績をつけるという課題を設定しました。最後に発表会をしましたが，例年のようにグループ討論がよかったというTAが多くいました。

語学分科会：TA の権利を強調

最初に導入として渡辺・竹本による簡単な講義をしました。渡辺は、過去の例に基づいて望ましいTA、及び授業参加への具体的提言をしました。全般的なことから服装、態度に至る諸点に有益でユーモア溢る指摘と助言をしました。竹本は、午前中の講習ではTAへの要望が中心でしたので、逆にTAの権利に触れました。即ち、目下のところ、語学授業ではTAは教師の補助的任務をする目的で任用されているので、その任務を大きく逸脱するようなこと、例えば、授業そのものの肩代わりなどは有り得ないことを説明し、万一起きた際の対処を明示しました。最後に参加者の中から、TA 経験者数名の経験談、反省、提言が披露され、それに対する討論、竹本・渡辺からの意見、引き続いて、多くの参加者から熱心な質問と意見交換が交わされました。最後に出勤簿への押印を忘れないこと、4月、5月分は支払いが遅れることの連絡をもって実りある本会は終了しました。

情報分科会：デジタルデバイドをどう解消するか？

はじめに教官による情報処理教育におけるTAの現状と心構えを述べた後、TAの経験者である森康久仁さんに様々な経験談と注意点、その対処法について講演していただきました。その後、情報処理教育が抱える課題のひとつである、学生間のデジタルデ

バイドをどのように解消していきながら教育を行っていくべきかについて活発に討論を行いました。様々な意見が出た中で、学生のタイプが大きく？やる気のある上級者、？やる気の無い上級者、？やる気のある初心者、？やる気の無い初心者、の4つに分類でき、それぞれのタイプによって適応的に対処を変えていくべきだという考えに至りました。その中でも特に、？の学生に対するケアが最も重要であり、教えるべき課題を柔軟に取捨選択しながらできる限り個別対応をとり、やる気をださせることによって？のタイプの学生に変えていくべきであるという意見がでました。さらに、？の学生に関しても適切に課題を与えつつ、演習中に飽きさせることの無いよう、柔軟な対応をしていくべきだという意見が出ました。初めて計算機を使う学生と計算機を持っている学生のスキルのレベルが大きく違うことを前提としつつも、初学者の基礎能力アップを行わなければならない情報処理教育の抱える課題について、忌憚無き意見が飛び交い、有意義な研修となりました。

グループ討論に人気

回収したアンケートの集計によれば、最も有用であったとTAが考えるプログラムは、グループセッションで有効回答数88のうち66名がこのセッションをあげています。以下、パネル討論の14名、瀬名波先生の講演6名、「北海道大学の全学教育」2名と続きます。コメント欄にはこれ以外に役立ったプロ

グラムも言及されており、学生のTA経験者による講演やコーヒブレイクも人気がありました。研修時間については短すぎるという意見も長すぎるという意見もありまちまちでした。グループ学習が有用であると考えた学生は時間が短いと考えたようです。また、参加者が予想以上になってきたため、直前に

会場を変更することになり、そのことに対する苦情がありました。この場を借りて謝罪いたします。研修を受ける人数が多すぎるとか、自分の職務にあまり関係のない話があるなど、対象が広がったことによりこれまでのプログラムで応じきれない面もあり、今後の改編の必要性が示唆されました。

私のTA (Teaching Assistant) 体験談

工学研究科分子化学専攻修士課程2年 堂河内 寛

私は同じ講座の2人とともに平成14年度前期の特別講義「北海道大学の人と学問」でO教授の補佐役としてTAを行いました。この講義は週2回あり、合計で1000人近い受講者がいます。さまざまな学部の実生が数人交代でおこなっており、私たちの仕事は主に講義の際に学生に出席確認のコメント用紙を配布し、授業終了後にそのコメントを回収して学部ごとに分別して授業担当者に届けることでした。この授業は大教室で行われ、受講者が500人近くいるために担当教員が各学生の授業態度などから成績を評価することが不可能であり、授業終了後に提出させるコメントの内容が学生の評価となります。そのために私たちは学生の評価を正しく行うために出席には執拗にこだわりましたが、実際にどれくらい大変な仕事であるかということはTAを始めるまで想像もつきませんでした。

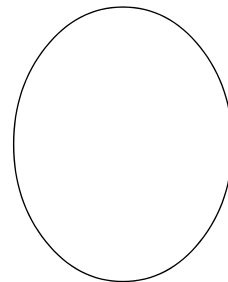
出入りを繰り返す学生

授業は週2回、どちらも朝一限目に大講堂で行われるので私たち3人は8時頃に集合して大講堂前のドアで待ち、入ってくる学生に出席代わりのコメント用紙を配りました。いざ配ってみると、学生は教室を何度も出入りを繰り返しては他の学生の分の用紙をもらおうと必死で、授業が始まる直前となるとドアの前は大行列となりました。しかし、これはまだまだ続く争いの始まりでした。

はじめのうちはコメント用紙を配るのに必死でしたが数を重ねるごとに余裕ができ、出入りを繰り返す学生を見つけては注意していました。私たちが出席を厳しくするにつれ、他の授業で使った用紙を使う学生が現れはじめました。どれくらいの学生がこの授業に参加せずに代返しているのかが気になったので、用紙に見えないような位置に印をつけて配布し、印のない用紙を数えました。私はたかだか数人だろうと思っていましたが、約1割強の学生が代返していることがわかりました。これでは授業の意味がないと思い、次の授業で代返の数を公表して出席するように喚起しました。まだごまかす学生がいたのでごまかした学生の学部ごとの数を公表しました。名前は公表しませんでした。それ以降ごまかす学生が激減しました。

他では厳しくない？

他の授業ではそんなに厳しくなかったといって反抗する学生がずいぶんいましたが、抗議する際は威勢がいいのですが自分の過失により出席を逃したことを知った上での出席への抗議だったので、案外素直に聞き入れてくれました。多くの学生は指導者（大



まかなくくりで言えば先生やTAなどの人々)の顔色を窺いながら不満を述べており、学生が厄介になるのは指導する側が毅然とした態度で学生に臨んでいないことも原因の一つに挙げられるかもしれません。今回、本講義を担当した私たち3人のTAは、出席に関する不正はだれ一人許さない姿勢を前面に打ち出しており、不満をこぼしていた学生が講義の回を重ねるごとに少なくなっていました。

この授業は出欠が厳しいですが、そのことが幸いしたのか、授業態度も次第に良くなっていました。出席確認が甘かった頃の授業感想文では「よかった」としか書いていなかったり、代返のために友達の名前はわかってても学籍番号は知らなかったのか学籍番号が空白の学生がずいぶんいました。出席確認が厳しくなるにつれてほとんどの学生が感想文をまじめに記入していくようになりました。学生ごとに出欠を厳しく確認する作業は、学生とTAを行っている我々が1対1で向き合うきっかけを作り、学生各人が授業に責任を持って受けることを促したと思いま

す。

北大生を育てるTA

この経験を通して、教育に携わる者は遅刻したりまじめにレポートを書かない学生には、それなりの責任を負わせなければならないと感じました。TAとは大げさに言えばこれからの北大生を育てることを担った仕事であると私は考えております。駄のなっていない学生を指導しないで放っておくことにより、出席にだらしがなく講義を真剣に聞かない学生が反省もしないままに受講してしまうことにもなりかねないのです。指導する側が毅然とした態度でのぞめば学生はきちんと授業を受けるようになります。しかしそれはただ一つの授業でのみ出欠、採点が厳しいだけではだめで、どの授業も出席、採点に厳しい必要があります。私は大学の教育にわずかではありますが携わりましたが、TAの経験は単なるアルバイトではなく、教育というものの本質に触れる良い機会になると思います。

表3 2003年度高等教育開発研究部研究員一覧

高等教育開発研究部 18名
(学内17名)

氏名	所属	専門分野	研究テーマ	区分
北村 清彦	文学研究科教授	美学・芸術学	コアカリキュラムにおける芸術科目の研究	継続
堀田真紀子	言語文化部助教授	表象基礎論	〃	〃
常田 益代	留学生センター教授	美術史および建築史	〃	〃
石原 次郎	文学研究科助教授	文学理論・美学	〃	新規
新田 孝彦	文学研究科教授	倫理学	コアカリキュラムにおけるSTS(科学・技術・社会)科目の研究	継続
柄内 新	理学研究科助教授	免疫発生学	〃	新規
原島 秀吉	薬学研究科教授	薬剤学・製剤学	〃	〃
佐伯 昇	工学研究科教授	コンクリート工学	〃	〃
恒川 昌美	〃	資源処理学	〃	〃
服部 昭仁	農学研究科教授	食肉利用学	〃	〃
瀬名波栄潤	文学研究科助教授	英文学	TA研修の在り方に関する研究	〃
猪上 徳雄	水産科学研究科教授	食品加工・貯蔵	〃	〃
小野寺 彰	理学研究科教授	結晶物理・相転移	大学における初習理科の研究	〃
徳永 正晴	副学長	誘電体・統計力学	〃	〃
佐々木陽一	理学研究科教授	錯体化学	〃	〃
柄内 新	理学研究科助教授	免疫発生学	〃	〃
在田 一則	理学研究科助教授	構造地質学	〃	〃

(学外1名)

氏名	所属	専門分野	研究テーマ	区分
三浦 洋	千歳科学技術大学講師(非常勤)	哲学	コアカリキュラムにおける芸術科目の研究	継続

生涯学習

LIFELONG LEARNING

北海道大学における 今後のインターンシップのあり方について —学生委員会インターンシップ専門委員会答申—

学生委員会のもとに設置された「インターンシップ専門委員会」（委員長：野口徹工学研究科教授）において、今後のインターンシップのあり方について検討してきたが、去る3月18日に開催された学生委員会に答申を行い、了承された。今後はこの答申を踏まえ、具体的に事業の実施を進めることになる。

以下は、同答申の基本的考え方である。

各学部・研究科等のインターンシップ事業の現在の実施状況および全学事業に対する意見を集約し、北海道大学における今後のインターンシップ事業に関し、基本的に以下のように考える。

正課のカリキュラムに

○北海道大学でのインターンシップ事業実施は、職業意識の育成および修学意義自覚等の上で有効である。

○インターンシップ事業推進のためには、これをカリキュラム上の正課として位置づける方向で考える必要がある。

○全学としてインターンシップ事業の推進、運営に関わる委員会（北海道大学インターンシップ運営委員会（仮称））を組織する。

○現在、各学部・学科（研究科・専攻）単位で行っているインターンシップ事業は、各実施単位の意向により、そのままの実施形態で、全学事業の一部として位置づける。

○現在、インターンシップに相当するカリキュラム上の制度を持たない学部・学科（研究科・専攻）には、それらの意向を尊重しつつ、正課としての導入を検討するよう要望する。ただし、実施の形態、方法は、各実施単位に委ねる。

○医学系など、独自の学生研修制度を実施している学部・学科（研究科・専攻）、ならびに、インター

ンシップ事業が教育の実情にそぐわない学部・学科（研究科・専攻）があることを意識する。これらについては、全学のインターンシップ事業への参画の有無、形態は各学部・学科（研究科・専攻）の意向を尊重する。

○全学教育プログラムの中に、何らかの形で正課としてのインターンシップ科目を開講するよう、検討を要望する。

○現在、北海道地域インターンシップ推進協議会との関連により、正課外として実施されているインターンシップ事業は、当面これを継続する。全学の実施体制が整備された後は、正課としての事業に移行させる。

○これまでの経緯を考慮し、全学教育プログラムの中でのインターンシップ事業の実務の主要部分は、高等教育機能開発総合センター生涯学習計画研究部及び学務部厚生課が担当することが適当である。

○北海道大学インターンシップ運営委員会（仮称）の任務は、主として、全学としてのインターンシップ事業の推進、運営、各学部・研究科間の連絡調整、および成果のとりまとめ公表等とする。

ガイドラインづくり

○各実施単位によるインターンシップ事業の受入れ先（企業等）の開拓は、原則としてそれらの「自給自足」とする。しかし、北海道大学インターンシッ

プ運営委員会（仮称）で情報交換し、全学として必要な協力を行う。

○北海道大学としてのインターンシップ事業実施状況の広報用リーフレットの作成を検討する。

○全学でのインターンシップ事業の記録および必要な外部への開示資料として、各学部・学科（研究科・

専攻）における事業の実施状況、成果、学生からの報告書（開示可能なもの）等をまとめた年次報告の作成を検討する。

○インターンシップ事業の実施形態、実施方法は各実施単位に委ねるが、本専門委員会にて、おおよそのガイドラインを示す。

入学者選抜

ADMISSION SYSTEMS

AO入試の3つの課題 —平成14年度第2期高校訪問から—

平成15年度AO入試の一次もしくは二次選考において合格者を出した高校を中心に、1月から3月にかけて全国約80校を訪問してきました。主な訪問目的は、（１）現行AO入試の問題や課題の聞き取り、（２）受験した生徒の学生像の確認、（３）次年度以降の出願依頼、です。

今回の訪問の結果、北大のAO入試の内容に関して、以下のような点で多くの高校から評価をいただいていることが分かりました。

？受験に必要な学力ではなく、受験者のやる気や資質を含めた真の学力を評価しているAOらしい入試である

？面接試験や課題論文などに工夫が凝らされており、短時間ながらも受験者の資質を見抜こうとする意欲が感じられる

？合格後に大学入学前の導入教育を実施しており、合格後も合格者の資質を伸ばそうという姿勢が見られる

一方、AO入試のやり方については、以下の三つの課題が浮き彫りになりました。

第一の課題は、一次選考における書類に関するものです。特に、高校の先生方に書いていただく個人評価書は、多くの場合、生徒自身が書く自己推薦書を裏付けるように書かれるため、評価対象としての意味が薄いということです。また、自己推薦書も高

校教員の指導が加わっている場合が多く、評価が難しいと感じます。

第二の課題は、実施時期に関するものです。特に進学校に見られる傾向ですが、一般受験では北大に入れるかどうか危うい生徒層を受験させる場合が多いようです。現在の実施時期では、不合格の場合にセンター試験や個別試験への影響が大きいのが理由です。

第三の課題は、AO入試の趣旨が主に以下の二点において高校側に十分に伝わっていないことです。

（１）北大のAO入試が学力重視であるということ、（２）北大の求める学生像が高校生や高校の先生方にとってまだまだ具体的に理解しづらいこと、です。

今後、現行AO入試の利点をさらに引き出すとともに、抱えている課題を解決していくために、入学者選抜企画研究部およびアドミッションセンターでは、AO実施学部および高校に協力を仰ぎ、選抜方法、広報戦略、追跡調査のそれぞれについて実践的な研究会を立ち上げていきます。また、AO入試の理解促進を図るために今年度も高校訪問を積極的に行うとともに、高校生に直接情報を伝えられるような広報活動を展開していく予定です。今年度もどうかご協力下さいますようお願い申し上げます。

センター日誌

CENTER EVENTS, Feb. - Mar.

2月

- 5日 ・ (会議) 第34回公開講座専門委員会
- 7日 ・ (会議) 第3回教務委員会成績評価等検討WG
- 11日 ・ (説明会) 北大説明会(奈良地区の高校)
- 12日 ・ (会議) 第7回教務委員会教育システム弾力化検討専門委員会
- ・ (会議) 第19回教務委員会教務情報システム専門委員会
- 13日 ・ (会議) 平成14年度第3回予算・施設委員会小委員会
- 17日 ・ (会議) 第100回全学教育委員会小委員会
- ・ (会議) 第23回高等教育開発研究委員会
- 18日 ・ (会議) 第79回センター教官会議
- ・ (会議) 平成15年度第4回AO入試委員会
- 19日 ・ (会議) 第18回教務委員会共通授業検討専門委員会
- 20日 ・ (会議) 平成14年度第3回予算・施設委員会
- ・ (会議) 第3回教務委員会外国語教育の在り方検討WG

- ・ (訪問) 京都外国語大学
- 21日 ・ (会議) 第47回全学教育委員会
- 24日 ・ (会議) 第28回教務委員会幹事会
- ・ (会議) 第25回生涯学習計画研究委員会
- 27日 ・ (会議) 第35回公開講座専門委員会

3月

- 4日 ・ (会議) 第24回教務委員会
- ・ (訪問) 京都工芸繊維大学アドミッションセンター・国立教育政策研究所
- 5日 ・ (会議) 第47回センター運営委員会
- 12日 ・ センターニュース第46号発行
- ・ (訪問) 三重大学
- 18日 ・ (会議) 第80回センター教官会議
- 20日 ・ (会議) クラス担任代表会議
- ・ (会議) クラス担任全体会議
- 24日 ・ (訪問) 名古屋大学教育学部
- 26～27日 ・ (調査) 入試広報及び高大接続に関する調査(九州大学アドミッションセンター)
- 28日 ・ (訪問) 名古屋大学教育学部

行事予定

SCHEDULE, May - October

	【日(曜日)】	【行事】	【備考】
5月	上旬 ～ 下旬	定期健康診断	
6月	5(木)	開学記念行事日	休講
	5(木) ～ 8(日)	大学祭	休講
7月	23(水) ～ 25(金)	補講日	
	28(月)	第1学期授業終了	
	29(火) ～ 8月8(金)	定期試験	
8月	11(月) ～ 13(水)	追試験	
	11(月) ～ 9月30(火)	夏季休業日	
	26(火) 正午	定期試験及び追試験成績提出締切	
9月	中旬 ～ 下旬	進級判定及び学科等分属手続	当該学部
	24(水) ～ 26(金)	集中講義期間	
10月	1(水)	第2学期授業開始	
	9(木) ～ 10(金)	1年次履修届受付	
		2年次以上履修届受付	当該学部
	10(金)	追加認定試験成績締切	

センターニュース 2003, No. 47 目次

巻頭言	佐々木 陽一 1
全学教育の科目責任者からひとこと	3
「人間と文化」担当責任者 横井 敏郎	3
「社会の認識」企画責任者 岩田 智	3
「環境と人間」担当責任者 飯田 浩二	4
「生物学」企画責任者 栃内 新	4
2003年度全学教育科目責任者名簿	5
重要さを増す TA 研修会	6
私の TA (Teaching Assistant) 体験談 堂河内 寛	9

2003年度高等教育開発研究部研究員一覧	10
北海道大学における今後の インターンシップのあり方について —学生委員会インターンシップ 専門委員会答申—	11
AO入試の3つの課題 —平成14年度第2期高校訪問から—	12
センター日誌・行事予定	13
目次・編集後記	14

編集後記

野球の季節がやってきた。キャッチボールに興じる子ども達の笑顔は忘れられない。

「出前授業」に「単位互換」.....高大連携花盛りである。「しかしこれで良いのか?」と感じているのは、私だけではあるまい。

連携とは、もっとインタラクティブなものではないか。連携とは、もっと文脈がはっきりしたものではないか。

理念不毛の時代である。だからこそ、生徒の資質を伸ばすという接点で、高大のアイデンティティを摺り合わせなければならない。思いを込めたキャッチボールこそが今必要なのである。(うさぎ)

センターニュース 第 47 号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日: 2003 年 4 月 25 日

発行元: 北海道大学高等教育機能開発総合センター

〒060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目

電話 (011)716-2111 ・ FAX (011)706-7854

編集委員: 小笠原正明・西森敏之・◎細川敏幸・

町井輝久・安藤 厚・山岸みどり・鈴木 誠・

池田文人・亀野 淳

ご意見, お問い合わせは◎印の編集委員まで

電話: (011)706-7514; FAX (011)706-7521

インターネット ホームページ: <http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/center>